

「全鍍連」 2022年 10月号 いきいき地域

全鍍連情報・国際委員 岡崎 淳一（ジャスト㈱ 代表取締役社長）

「趣味について」

二回目の寄稿となります。「東北・北海道表面処理工業組合」副理事長の岡崎でございます。さて、今回は山形の由来について寄稿いたしましたが、今回は小生の趣味に関してご紹介をさせていただきます。

小学校3年生からサッカーを始めて、高校3年まで続けておりました。約10年間、毎日暗くなるまでボールを蹴っていたことを思い出します。小学校6年の時には山形県代表として全国大会に出場致しました。当時はキャプテン翼ブームで、全国大会会場のよみうりランドに行くことに全ての小学生が憧れたのではないのでしょうか。そして、中学、高校と進み、高校でも国立競技場に行きたいという憧れを皆が抱いたのではないかと思います。運よく夏のインターハイと冬の選手権に出ることができ、憧れの国立競技場を入場したことをいまだに記憶しております。このようにサッカー一筋で生きてきていた中で、大学進学と共に出会ったのがサーフィンでした。大学は函館で、海に面した異国情緒あふれるこの街、そして何より極寒の北海道でサーフィンとは、いささか変態の領域ともいえることでした。入学当時、ロン毛だったということもあり、サーフィン同好会の方々に囲まれてサーフィンやらないかというお誘いで、とりあえず見学に行きました。サーフィンを見ることが初めてで、波に乗る人の姿に衝撃を受けました。すごい！これは楽しそうだと一発でやることを決心しました。ここから苦難の日々が続きます。まずは、ショップでウエットスーツをオーダーし、サーフィン人生のスタートを切りました。小学校1年生から4年生までスイミングスクールに通っていたので、泳ぐことに何の抵抗もなく、初日から沖に出ることが出来ました。しかしながら、サーフィンは水泳とは違いパドルングという独特の漕ぎかたをします。これをマスターするのに半年かかりました。また、波の下に潜って、大きな波を通過しなければ沖には出れないので、ドルフィンスルーという技術もマスターしなければなりません。これも半年かかりました。ほぼ毎日海に入っていたので波に乗ること自体は1か月で乗れるようになりましたが、横に滑って行くことや、技を覚えるのに2年かかりました。大学4年の時に、サーフィン検定3級を取得しました。そんなサーフィン三昧の大学生活が終わり、神奈川県に就職となりました。コネクタメーカーに就職致しましたが、運よく会社の先輩にサーフィンされる方がいたので、週末は毎週一緒に千葉県の大和田で日が暮れるまで波乗りをしておりました。また、営業担当のエリアで湘南地域をまかせられ、営業中も湘南で波乗りしたこともありました。長期休暇で、全国各地に遠征に行ったこともありました。また、大会に出たり、検定を受けたりとサーフィン



モロッコ

中心の社会人生活となっております。そして、29歳で山形に戻り現在も山形から車で一時間の宮城県山元町というところでサーフィンを続けております。海外でもサーフィンをしており、ハワイ、オーストラリア、カリフォルニア、インドネシア、タイ、フィリピン、ポルトガル、モロッコ、コスタリカ、など有名なサーフスポットへの遠征もしてきました。いつまで続けられるかわかりませんが、体が動くまでは続けていきたいと思っております。

サーフィンを通じて、自然への畏敬(いけい)の念と入水できることへの感謝や地元の方に対するリスペクトなどを学び、心身を穏やかにして生きております。また、この精神が仕事でも通じるところがあり、森羅万象(しんらばんしょう)をしっかり受け止めて仕事に取り組んでおります。そして、「荒らしい波に乗ったサーファーほど遠くに進むように、荒々しい運命に乗った人ほど進歩していく」という理念を掲げて、混沌とした今を乗り越えていきたいと思っております。そして、全鍍連会員の皆様としっかり情報交換をしながら共に成長できますことを願っております。



ポルトガル



コスタリカ